（二〇一三年度）

2 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は23ページ、三問である。）

受験についての注意

一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
五、**解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**その他の部分には何も書いてはならない。
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

宮沢賢治ほど擬音のつくり方を工夫し、たくさん詩や童話に使った表現者は、ほかにみあたらない。眼にうつる事象のうごきを、さかんに音の変化や流れにうつしかえようとした。はんたいにぴったりした語音があると、すぐにかたちの像(イメージ)に転写できる資質も、なみはずれていたとおもえる。たとえば「オツベルと象」で稲こき機械のまわる音を「のんのんのんのんのん」とあらわす。[1]わたしたちが回転音にふつう与えている「ぶんぶんぶん」といった擬音とどんなにへだたっていることか。のん、のんというのはたんに回転音をじっさいの音に近づけただけでなく、まわっている突起のある円筒のかたちがあざやかにうかぶ気がしてくる。だれもこんなふうに、語音とその物のイメージをむすびつけた擬音をつくったものはない。

そしてもっといえば、[2]事象のうごきが音を介して物語化される。「双子の星」のなかで彗星(すいせい)がよぎってゆくさまを「ギイギイギイフウ」と形容する。この擬音は彗星の擬人化だが、同時に彗星のうごきを童話の軌道にのせて物語化しているのだ。いかにもあえぐように息をしながら、そんな音をたてて彗星が空をうごきまわっているようにおもえてくる。

宮沢賢治は[3]擬音をさらに形而上化するところまでは、つきすすんだ。晩年の未定稿の詩〔丁 丁 丁 丁 丁〕にでてくる「尊々殺々殺」といった擬音の言葉は、漢字のかたちにつきまとうまがまがしさ、無気味さと、表音がつくっている魂の擦れあう気合いの息づかいのようなものがむすびついて、こころのある状態を音のかたちにしている。ここまできてかれが擬音を、たんに音喩(オノマトペ)以上の機能で、じぶんの資質の肉に喰いこんだあたりからとりだそうとしているさまが、つたわってくる。

丁丁丁丁丁
丁丁丁丁丁
叩きつけられてゐる　丁

叩きつけられてゐる　丁
藻でまっくらな　丁丁丁
塩の海　丁丁丁丁丁
熱　丁丁丁丁丁
熱　熱　丁丁丁
（尊々殺々殺
殺々尊々々
尊々殺々殺
殺々尊々尊）
ゲニイめたうとう本音を出した
やってみろ　丁丁丁
きさまなんかにまけるかよ
何か巨(おお)きな鳥の影
ふう　丁丁丁
海は青じろく明け　丁
もうもうあがる蒸気のなかに
香ばしく息づいて泛(うか)ぶ
巨きな花の蕾(つぼみ)がある

（「〔丁丁丁丁丁〕」全篇）

「丁」は身体が海の水のなかで、波で岩にたたきつけられる音を表象する擬音だとみられる。そして全体は身体が高熱に浮か

され、苦しさにあえいでいる状態の暗喩になっている。この「丁」は甲乙丙丁の「丁」として、どん尻をあらわす子どものときから馴染(なじみ)ぶかい文字だった。それでいて文字のかたちからくる表象は、どことなく無気味な感じをあたえられる。〈チョウ〉という語音とかたちからくる気味の悪さが、この音喩にふくまれているものだ。（　）のなかの「尊　々　殺　々　殺／殺　々　尊　々　々／尊　々　殺　々　殺／殺　々　尊　々　尊」という繰りかえしは、熱に浮かされて苦しい身体の状態を、はねかえそうとする病者（作者）の意想の状態が、作者賢治の形而上学である仏典の呪詞にちかい音と、〈とうとい〉と〈ころす〉という対照的な意味をあらわす語の組合せ、あるいは〈とうとばれる〉と〈ころされる〉という対照的な意味をあらわす語音によって表象された音喩とみなされる。そして詩の前半は高熱にきしむようにうちつけられている病身の状態の暗喩だとすれば、後半は高熱にうなされた幻覚状態の暗喩になっている。この幻覚の風景は、あおじろい明け方の海で、水面から蒸気がのぼって、もやのようなうす白い蒸気のなかに、おおきな花の蕾の幻覚像が呼吸のように息づいてうかんでいる。死の影がちかづいてくる感じをこらえて、立ちむかっているときの幻覚の光景と幻聴の音がえがかれている。ゲニイという人名の由来はまったくわからないが、幻聴のなかでそうきこえた名前とおもえる。単純な音喩でありながら、詩の全体の死のおびえや、怖れの暗喩の役割をはたしているようにみえる。この擬音の機能は、賢治が言語にたくした最後の願望にかなうようにおもえる。

物はうごくとき音にふれる。擬音はこのひとりでにふれた音に、間と切断と持続のパターンをあたえることだ。それは音の幾何学化だといえる。さらに擬音を言葉でいおうとすると、もともと意味をつくる機能を第一義にしている言語を、意味以前のところでとどまるように、[4]分節化の以前の「不完全」な機能でつかわなくては由緒ある擬音にはならない。

ひとつの事象がひとりでにうごくとき、生物が本能的に行動するとき、また人間が無意識に移動するとき、耳にとどく音にふれえないときもある。この音にふれえないうごきは眼でみられることがある。[5]この音にふれないが眼でみえる事象のうごきを、音韻の機能だけであらわしたらどうなるか。これもまた擬音の世界をもたらすにちがいない。うめばちそうの白い花がゆれるさまが「ぷりりぷりり」と表現されると（「十力の金剛石」）、いくらか固い感じのする花の動きがみえるような気がするし、鈴蘭の葉や花が風にふれあうさまが「しゃりんしゃりん」と音化されると（「貝の火」）、わたしたちは花のかたちとうごきを同時

に感じられる気がしてくる。かたちとうごきが音象ともいうべき状態で伝わってくるからだ。

擬音の世界は、分節化できて意味になった言葉を、まだ完全にはしゃべれない乳児期の世界になぞらえられる。また言語障害の世界、高等哺乳動物の世界、鳥類や生物の鳴き声の世界に似てくる。こういうぜんぶをひっくるめた音は、[6]幼ない子どもの音声でつづられた世界に似ている。そしてこの世界をそうしようとおもって幼稚にしたり、滑稽にしたり、また生き物の音声を図式化してみたり、幾何模様にしてみたりすることでえられる効果とおなじ意味になる。

またはんたいに擬音の世界は、天然の現象、無生物、植物、微生物、虫類、生物などの音声やうごきに半ば意味をあたえ、あるばあいには言葉をしゃべるとおなじ擬人化の効果をもたらす。そうすると無機物や有機体の生命の世界が高度になり、ひとの世界にまでひきあげられることになる。霧がふるさまが「ぽしゃぽしゃ」とあらわされるとき（「朝に就ての童話的構図」）、針金を鳴らす音を「リラリラ」といってみたり（「ツェねずみ」）、月の光を形容するのに「ツンツンツン」とあらわしたり（「気のいい火山弾」）、鎌がひかるさまを「シンシンシン」とあらわしたり（「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」）しているのをみると、擬音が半ばものをひとに似せ、半ば言葉の意味をあたえる役割をはたしている感じがする。[7]音を半ば擬人化することが、半ば意味ある音声になっているのだ。

（吉本隆明『宮沢賢治』）

問一　傍線部1について、筆者は宮沢賢治の擬音のつくり方が私たちとどのような点で「へだたっている」と考えているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　私たちが常識的に用いる「ぶんぶんぶん」のような擬音の存在を否定している点。

b　擬音を音の模写には用いず、語音とその物のイメージを結びつけるために用いている点。

c　目の前の事象を、なみはずれた数の擬音をもって文字に定着させようと努力した点。

d　単なる音の模写にとどまらず、その音を生み出す物を読み手にイメージさせることができた点。

問二　傍線部2はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　童話に登場する「彗星」のような人間でないものを擬音を用いて擬人化することを通して、読み手が抱くかもしれない違和感を低減し、物語を受け入れやすくしていること。

b　擬音を用いることがなかだちになって、その場面の出来事の動きや変化の様子がはじめて描写可能となり、読み手の理解を助けていること。

c　「彗星」のような登場者を童話という形式になじむ形で描写しながら、その話の中における特別な存在として位置づけていること。

d　擬音のもたらす効果が単なる事象の形容にとどまらず、その場面に登場する人、動物、星などに存在感を与えるとともに、話の筋の中で、いまどのような状況に置かれているかを描きとっていること。

問三　傍線部3はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　擬音とその音にあてた漢字を交錯させて、聴覚的、視覚的イメージの描写のみならず、はっきりとした形を持たない自身の心の奥底までが表出されてしまう形で、擬音を詩作に用いていること。

b　聴覚的イメージを描写する際に用いられる擬音を多用しながら、観念的な立場からも、自身の心情が議論されるような形で擬音を選んでいること。

c　音でたとえるという擬音の機能を最終的に振り捨てて、もっぱら自身の心情をその細部まで表現する手段として、擬音を用いるところにまで到達していること。

d　自身の資質の本質にリアリティーを与えるため、晩年の詩作では、擬音の聴覚的、視覚的イメージを喚起する力を活用していること。

問四　筆者は、宮沢賢治の詩〔丁 丁 丁 丁 丁〕の表現をどのように理解しているか。次の中から適切なものを三つ選べ。

a　「丁」の擬音としての効果は、身体が波で岩にたたきつけられる音を表現するとともに、身体が高熱に浮かされ、苦しんでいる賢治の状態を直接に写しとっているものである。

b　「丁」という漢字表記は見慣れたものでありながら、この詩の中では、その発音「チョウ」と重なりあい、気味の悪いイメージを喚起している。

c　「尊」と「殺」の二文字は、〈とうとい〉と〈ころす〉、または〈とうとばれる〉と〈ころされる〉のいずれか一方に解釈されるべきものである。

d　「尊 々 殺 々 殺／殺 々 尊 々 々／尊 々 殺 々 殺／殺 々 尊 々 尊」という繰りかえしは、仏典の呪詞を思わせる響きを持っている。

e　高熱で意識のはっきりしない状況で感じた死の予感が、「巨きな鳥の影」という表現の中に込められている。

f　青白い明け方の海は、死に立ち向かいながらも、それに耐えきれなくなった作者賢治の心象の現れと考えられる。

g　ゲニイという幻聴としての人名は、賢治の死に対するおびえや怖れの理由を暗示している。

h　「巨きな花の蕾」は、生と死のはざまに踏みとどまるなか立ち現れてきた幻覚像と読み取ることができる。

問五　傍線部4のように筆者が述べるのはなぜか。次の中からその理由としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　擬音は物が自然に発した音に言語音としてのパターンを与えるものであるが、そのパターンの与え方に不十分な点を意図的に残しておかないと、擬音としての効果は不十分なものになってしまうものだから。

b　擬音を言語ならざるものとして使うためには、間と切断と持続により形作られる幾何学的なパターンを擬音に与え、意味との結びつきを断ち切る必要があると考えられるから。

c　擬音は現実の音そのものではなく、それを言語音で表現したものであるが、だからと言って、表現しようとしている事象を音のイメージではなく、はっきりした概念と結びつけてしまったのでは、もはや擬音ではなくなってしまうから。

d　言語の持つ現実の世界を概念化する働きから逃れるためには、物が発する音を表現する際には、言語音から逸脱した表現を擬音として用いるように工夫しないと、擬音が擬音としての効果を発揮することにならないから。

問六　傍線部5について、「この音にふれないが眼でみえる事象のうごきを、音韻の機能だけであらわ」すとはどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　音としては私たちにとどかないうごきについて、視覚的なイメージを聴覚的なイメージで覆うように表現すること。

b　音を伴わない自然なうごき、本能的・無意識的うごきを、言語音を用いて、対応する概念と結びつけること。

c　音を発さないある事象のうごきやかたちを、音のイメージを用いて写し取ること。

d　耳にはとどかないが、微かに発せられている音を擬音化し、視覚的な印象として提示すること。

問七　傍線部6はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　声に出すこと自体が目的となり、言葉が必ずしも対象の意味を目指していないような世界。

b　身の周りの事象が、大人と同じような定まった形では、言葉によって分節化されていない世界。

c　いまだ成長の過程にあるため、発音が十分に習得されないまま、声に出さざるをえない世界。

d　分節化によって意味を獲得した言葉と同様に、擬音を用いて周囲の出来事の意味を定着させた世界。

問八　傍線部7のように筆者が述べるのはなぜか。次の中からその理由としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　分節化された言語を用いた擬人法の場合よりも、擬音をそのまま擬人化して、自然現象や生物・無生物の描写に用いる場合の方が、それらの性質や置かれた状況を描写するのにより大きな効果を上げることになるから。

b　自然現象や生物・無生物の発する音やうごきを擬音で表すと、人間の様子や言動を描写するのと同じような効果が現れ、自然現象や生物・無生物があたかもそれぞれの個性を持った存在のようにイメージされてくるから。

c　無機物や有機体を、そのうごきからイメージされる音を用いて人間になぞらえていくことを通して、無機物や有機体の生命の世界が活性化し、物語の世界が進行していく効果をもたらすから。

d　無機物や有機体にも生命が宿っているというのが宮沢賢治の基本的立場であるため、描写に擬音を用いることがそのまま擬人化の効果につながるのは、物語内部の論理から見て当然の帰結であると考えられるから。

問九　次の文章のうち、本文の趣旨に合致すると思われるものを二つ選べ。

a　宮沢賢治は、詩や童話の中における擬音の使い方に工夫を凝らしたばかりでなく、逆に擬音を具体的な形を持ったイメージに結びつけるという点でも、卓越した才能を発揮したと言える。

b　宮沢賢治の晩年の創作では、擬音を具体的な音のイメージと結びつけず、文字表記のイメージに寄りかかりながら用いる意図が感じられる。

c　擬音とは、物のうごきの中から発せられる音を、その生の音の連続性を生かしながら定着させ、言語音から逸脱したところに成立するものである。

d　擬音の持つ言語表現としての特質は、一見、読み手の音感覚に頼るところにあるように見えるが、宮沢賢治においてはむしろ、読み手の感覚とは必ずしも一致しない、彼の音感覚の特異性が発揮されるところにその特質がある。

e　宮沢賢治の作品内における擬音の使用は、眼にうつる事象のイメージを写し取る働きにとどまらず、あたかも意味ある言葉を表現しているかのような効果をもたらしている。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

東山のかたすみに、あばれて人もかけらぬあばらやに、[1]いとやさしく、いまだ人なれぬ女ありけり。[2]庭の荻原まねけども、風より外はとふ人もなく、軒ばのよもぎしげれども、杉むならねばかひなくて、月にながめ、嵐にかこちても、心をいたましむるたよりはおほく、花を見、郭公を聞きても、なぐさむべきかたは、まれなる事にて、明かし暮らすに、清水詣でのついでに、[3]思はぬほかのさかしらいできて、いたらぬくまなかりし御世に、ただ一夜の夢の契りを結びまゐらせてける。これも先[4]の世を思へば、かたじけなかりけれども、さしあたりて、嘆きに恨みをそへて、心のうちはるるまもなし。かひなくありふれど、いまひとたびの、言の葉ばかりの御なさけだに待ちかねて、よし、[5]これゆゑそむくべきうき世なりけり、と思ひ立ちて、[6]ありし御心しりのもとへつかはしける。

[7]なかなかにとはぬも人のうれしきはうき世をいとふたよりなりけり

とばかり心にくく、幼びれたる手にて、はなだの薄様に書きたるを、折をうかがひて奏しければ、まことにさることあり。たづねざりける心おくれこそ、と御気色ありければ、やがて走り向かひてたづぬるに、さらぬだにあれたるやどの、人すむけしきもなきを、[8]やや久しくやすらひて、老いたる女ひとりたづねえて、事のやうをくはしくとひければ、何といふ事は知り侍らず。あるじは天王寺へまゐり給ひぬ、といへば、やがてそれより天王寺へまゐり、寺々をたづぬるに、亀井のあたりに大人しき尼一人、女房二三人ある中に、いと若き尼のことにたどたどしげなるがあり。この心しりを見つけて、あさましと思ひげにて、ただやがてうつぶして、[9]泣くよりほかの事なし。かたへのものども、声を立てぬばかりにて、おとる袖なくしぼりければ、御使ひも見捨てて帰るべき心地もせず。大人しき尼は、この人の母なりければ、事のやう細かにたづねけれども、もとよりこれは思ひつる事なり。[10]なにしにかは、君の御ゆゑにて候ふべき。かしこく、といひもあへず泣きて、その後はこたへざりければ、よしなき御使ひをして、かはゆき事を見つるよ、と悲しくて、さりとても、ここにて世をつくすべきならねば、立ち帰りぬ。このよしを奏するに、はしたなの心の立てざまや。[11]心おくれがとがになりつるよ、とて、かひなかりけり。あはれに

も、やさしくも、[12]ながき世のものがたりにぞなりぬる。みそのの尼の心と、いづれか深からむ。

（『今物語』）

〈注〉東山…京都市内を南北に流れる鴨川より東に連なる丘陵。左京区から東山区の一帯を指し、清水寺もその一部に含まれる。

清水…京都市東山区にある寺院。観音霊場として著名。

天王寺…大阪市天王寺区にある寺院。四天王寺のこと。浄土信仰で著名。

亀井…四天王寺境内にある霊水。

みそのの尼…本話の直前の説話の主人公。

問一　傍線部1「いとやさしく、いまだ人なれぬ女」の解釈としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　美形ではあるが、教養もなく社会性もない女

b　性格が温和で、幼稚なところの残っている女

c　教養はあるが、まだ結婚はしていない女

d　気品があって、社交性も豊かな女

問二　傍線部2「庭の荻原まねけども、風より外はとふ人もなく、軒ばのよもぎしげれども、杉むらならねばかひなくて」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　女の家を訪ねる人もいなければ、女が人を訪ねることもなかったこと
b　女の家を訪ねる人はいなかったが、女はよく人を訪ねたこと
c　女が人の家を訪ねることはないが、女の家を訪ねる人は多くいたこと
d　女の家を訪ねる人もいなければ、女が家で人を待つこともなかったこと

問三　傍線部3「思はぬほかのさかしらいできて、いたらぬくまなかりし御世に、ただ一夜の夢の契りを結びまゐらせてける」とあるが、何が起こったのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　天皇の治世はすぐれていたが、何かの間違いで夢のような恋に落ちることとなった。
b　天皇の治世はすぐれていたが、意外な悪口を言う人がいて謀議に加担することになった。
c　天皇の治世はすぐれていたので、その天皇との逢瀬をお節介にも仲介する人がいた。
d　天皇の治世はすぐれていたので、観音との仏縁を仲介する人と運命の出合いを経験することになった。

問四　傍線部4「先の世を思へば、かたじけなかりけれども、さしあたりて、嘆きに恨みをそへて」とあるがどういう心情か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　前世からの因縁であったと思うと、もったいないことではあるが、当面はもう一度逢いたいのに逢えないのがつらい気持ち。

b　前世からの因縁であっても、失礼千万なことと腹立たしいが、今は我が身があわれでせつなくてならない気持ち。

c　来世に生まれ変わることを考えたら恥ずかしい限りだが、今はただ大変なことになったと自分の運命を嘆いたり恨んだりしている気持ち。

d　運命だったと思えばおそれ多い限りだが、あの夜のことが忘れられなくて、往生の支障になりそうなほどに逢いたくてたまらない気持ち。

問五　傍線部5「これゆゑそむくべきうき世なりけり」の解釈としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　こういうことがあるから世の中はよくならないのだ。

b　これをきっかけに世の中をよくしていこう。

c　これをきっかけに出家してしまおう。

d　こういうことがあっても恋はあきらめない。

問六　傍線部6「ありし御心しり」と同一の人物を指すのはどれか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「あばれて人もかけらぬ」の「人」
b　「いまだ人なれぬ女ありけり」の「人」
c　「風より外はとふ人もなし」の「人」
d　「思はぬほかのさかしら」をした人
e　「言の葉ばかりの御なさけ」をかける人

問七　傍線部7「なかなかにとはぬも人のうれしきはうき世をいとふたよりなりけり」の歌はどのような意味になるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　中途半端に来たり来なかったりでも、逢えたらうれしいものよ。恋なんてあてにならないものだから。
b　私を訪ねない人ってかえってうれしいものだわ。出家する良い機縁になりましたもの。
c　いっそ徹底して、あなたなんか来なければいいのよ。出家して山奥にでも引きこもってくれたら、どんなにすっきりしてうれしいことか。
d　なまじっか私を訪ねないばかりに、あなたは良い仏縁を得たというものだわ。観音様とでも恋をして、うつつを抜かすがいいわ。

問八　傍線部8「やや久しくやすらひて」とあるが、なぜそうなったのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　女の家が随分と田舎にあって、そこへ行くまでに随分時間がかかったから。

b　女の家にはもう誰も住んでいなくて、女との逢瀬の約束を果たせなかったから。

c　女に会うことができず、どうすれば会えるかもよくわからなかったから。

d　女はそこにもういなかったので、役目を果たす必要がないように感じたから。

問九　傍線部9「泣くよりほかの事なし」とあるが、どういう心情か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　尼として未熟な姿を見られてしまって、恥ずかしく思った。

b　今ごろになって会いに来たのかと、恨めしく思った。

c　尼になって初めて知人に会い、懐かしく思った。

d　今になって尼になったことを、悔しく思った。

問十　傍線部10「なにしにかは、君の御ゆゑにて候ふべき」とあるが、なぜだというのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　初めて逢ったときから、この日のことは決めてあったから。

b　初めて逢う前から、こうなることは決めてあったから。

c　歌を贈ったときから、この日のことは決めてあったから。

d　歌を贈る前から、こうなることは決めてあったから。

問十一　傍線部11「心おくれがとがになりつるよ」とあるが、どういう心情か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　女が出家した原因は、自分が女に逢う以前から女の心に決めていたことと知って、内心ほっとした。

b　女が出家した原因は、自分が女にやさしいことばをかけたからだと知って、同情した。

c　女が出家した原因は、自分が女を放っておいたからに違いないと知って、後悔した。

d　女が出家した原因は、女があまりにも強情な性格だったからだと知って、あきれ果てた。

問十二　傍線部12「ながき世のものがたりにぞなりぬる」とあるが、なぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　尼になってまで、女が一途に思う愛情の深さが感動的であったから。

b　尼になってまで、恨み続ける女の恨みの深さが恐ろしかったから。

c　尼になったらもう後戻りできないと知った女の愚かさが悲しかったから。

d　尼になった女の悲劇が、あちこちで繰り返されて社会問題になったから。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

もうずっと前から思考は脅かされている。思考は、集団によって脅かされている。あるいは機械によって、速度によって、メディアによって、[1]様々な〈異物〉によってはばまれている。機械は、思考の有機性に無機性を侵入させ、速度は思考に固有の速度をかき乱し、メディアは、直接性であろうとする思考を間接的にするからである。

[2]思考が脅かされていることなど、ちっとも「脅かし」とはとらえない傾向によっても、やはり思考は脅かされている。いま「思考が脅かされている」ということを一つの問いとしてたてようとするなら、そのような事態を少しも「脅かし」と感じない傾向に抗して、私たちは「思考が脅かされている」ことを問題にするのである。

思考が集団によって脅かされている、というとき、さしあたって私たちは、思考を個人の行為としてとらえている。「集団的な思考」というものもまた確かに存在するにちがいないのだから、思考をそのような集団的思考とは異なるものとして位置づけようとしているのである。

けれども、[3]思考を純粋に個人的な行為としてとらえることができるかどうか、決して自明ではない。それどころか思考そのものを、ある純粋な行為、過程、運動とみなすことは決してできないと考えられる。

私が考えることを妨害するのは、決して私の外からやってくる要素(日々の雑事、出来事、暴力)だけではなく、私の中の様々な要素(感情、怠惰、疲労、病等々)でもある。もう久しい前から思考は脅かされてきた。いつでも脅かされてきた。思考にとってかわろうとする異質な何かに脅かされてきた。あるいは思考不可能なものに脅かされてきた。しかし、その「脅かし」について考えようとすると、思考そのものが何だったのか、何であるのか、ありうるのか、もう一度考えざるをえない。

私はいったいどんな思考を問題にしようとしているのか、すぐにもいくつかの形容辞(個人的、哲学的、存在論的、政治的、社会的、文学的、批評的、詩的、等々)をつけて、思考を限定するところから始めるべきだろうか。けれども、そんなふうに始めることができないような形で、私は始めるしかない。何らかの定義によって思考を限定することができない地平で、ある

いは思考が限定的な何かにしたがう以前の地平で、思考を問おうとしているのだ。そこで、まず思考を脅かすものは何か、と考えてみるのだ。同時に、定義も、限定さえもまた、思考を脅かすものだと感じているのだ。

思考とは何かと問い、思考にとっての脅威、不安、不可能、あるいは破壊、解体、死のような様々な事態さえも考えることは、同時に思考の内部と外部の境界や、配置や、関係をとらえなおすことでもあるだろう。

それはまさに哲学の領分[4]ではあるまいか。

「思考を脅かすもの」について考えようとするなら、様々なかたちで「正しく考えること」を課題にしてきた哲学者たちの試みを忘れることはできないだろう。思考を脅かすものは、また哲学を脅かすものでもあった。しかし、思考が脅かされているということ自体を、切実に考えようとするなら、ただ哲学を援用することによって、この脅かしを退けることはできそうにない。この脅かしは、哲学との親密さを必要とすると同時に、どうしても哲学の圏外に、思考をひきずりだすようなのだ。「思考を脅かすもの」について考えるためには、哲学とともに考えるだけでなく、哲学そのものを問うしかない[5]。

もともと人間は、単に動物であって、考える動物などではなかった。あるいは思考するにしても、生きのび、行動するために思考してきたにすぎない。そこで、「本来の思考のあり方」を考えるような発想そのものが、ある歴史を背景にし、その歴史の強制や要請のもとにあった。人間は、例外的にしか、思考する存在ではなかった。いま、思考が脅かされているとしても、決してそれは例外的な事態ではない。

たとえば、ハイデガーのような哲学者は、古代ギリシア人こそが、「存在」の間近にあって、「存在」を思考しえたと主張し続けた。そのような思考は、その後、歴史の新たな展開とともに失われていった、と彼はいう。ハイデガーもまた確かに「思考が脅かされている」ことを問題にしながら、「存在」について問うていたにちがいない。ハイデガーにとって、人間は本来考えないものであったのではなく、本来考えるものであり、本来的に考えるものであった。その本来性は、デカルトでも、カントでもなく、プラトンでさえもなく、それ以前のギリシア世界の思考にまで遡及（そきゅう）することではじめて確かめられるようなものだった。

そんなふうにとらえられた「本来的な思考」を、日本語で考える私がいまどんなふうに共有できるか、さしあたってわからない。けれども、思考が脅かされていることを問題にするなら、[6]その脅かしの間で、疲弊し、変質していく思考のありさまを、何らかの本来性の影にてらしあわせることは避けられない。思考は、必然的に脅かされ、脅かしとともにあり、脅かしの中で成立し、変化する。脅かしから分離され抽象された、本来的な思考というものを、ほとんど思い描くことはできない。しかし、何らかの本来性がありえないとしたら、思考そのものが脅かされているという事態を考えることさえできないだろう。

（宇野邦一『反歴史論』）

〈注〉 ハイデガー…二〇世紀ドイツの哲学者
デカルト…一七世紀フランスの哲学者
カント…一八世紀ドイツの哲学者
プラトン…古代ギリシアの哲学者

問一 傍線部1「様々な〈異物〉」に相当するものは何か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a 純粋な行為、過程、運動のこと
b 「正しく考えること」を課題にしてきた哲学者たちの試みのこと
c 日本語で「本来的な思考」を展開すること
d 日常生活の雑用や、その時の感情や疲労度などのこと

問二　傍線部2はどのようなことを意味するか。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　思考が脅かされる歴史は古代ギリシアの時代から始まっており、それを「脅かし」として取り上げないのは、知的怠慢ですらあるということ。

b　思考が脅かされていることに無自覚な状態も、思考に対する脅かしの一つになっているということ。

c　思考を脅かすものとは何かを定義あるいは限定しても、やはり思考は妨げられていると感じてしまうものであるということ。

d　思考を脅かす機械、速度、メディアなどの影響はもはや過去のものであり、考慮するには値しないと見なしても、実際は脅かされているということ。

問三　傍線部3のように筆者が述べる理由は何か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　思考は、「政治的」あるいは「社会的」というような形容辞を付して使用されることがあり、個人的なものとは言い切れないから。

b　思考にとっての脅威となりうるものを考えるとき、それは思考の内部と外部の境界、配置や関係をとらえなおすことにつながるから。

c　この世界には「集団的思考」というものも確かに存在するのであり、思考のすべてが個人的な行為だと見なした場合には正しく考えることができなくなるから。

d　もうずっと前から思考は集団によって脅かされており、しかも機械や速度やメディアも思考の妨げになる時代が続いているから。

問四　傍線部4に相当しないものは何か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　思考を脅かすものを排除すること

b　思考とはそもそも何かを問うこと

c　正しく考える姿勢を貫くこと

d　「存在」について問うこと

問五　傍線部5のように筆者が述べる理由は何か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　思考することと哲学を実践することは根本的に相容れない行為であり、したがって哲学の存在意義を問い直すしか方法がないから。

b　思考を脅かすものが何であるのかを考察するとき、哲学の枠内にとどまっていては不十分であり、哲学を歴史の中で考えることが必要になるから。

c　哲学者が得意とする「本来的に考えること」を、日本語で思考する者がどうしたら共有できるのか、誰にもわからないままだから。

d　長い歴史において、人間は常に思考する動物だったわけではなく、したがって思考が脅かされたとしても、哲学が役立つ場面はあまり多くはないから。

問六　傍線部6は具体的にどのような意味か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　日本語で考える私が本来的な思考を共有できないこと

b　思考が個人の内からも外からも脅かされて、その力が衰弱すること

c　「存在」に関する思考が歴史の展開の中で失われてしまったこと

d　単なる動物だった人間が考える動物になったこと

問七　本文の内容に合致しないものを一つ選べ。

a　思考が脅かされていないと見なす傾向が確かにあるが、筆者は「脅かし」は存在すると認識し、それを問題視する。

b　思考を脅かすものは間違いなく哲学をも脅かすのだが、かといって哲学の助けを借りれば、思考に対する脅威をなくすことができるわけではない。

c　思考には本来性というものを想定することはできず、したがって思考が脅かされているという事態を考えることは不要である。

d　思考はいつも思考を妨げようとする何かによって脅かされてきたのだが、その脅威について考えるとすぐに、思考そのものの定義という問題が浮上する。